

敦煌写本 S.6836 「葉浄能詩」について ——説話の構造を巡って——

森 田 さくら

はじめに

ある一人の道士の活躍から衰退までが描かれる S.6836 「葉浄能詩」は、敦煌写本ただ一点のみが現存する長編作品である。「葉浄能詩」は物語の正式なタイトルではなく、冒頭部分の欠落により便宜上付された仮題であるが、その名の通り葉浄能しょうじやうのうという道士が、「符」と呼ばれるおふだを使った法術を駆使して難題を解決していく様子は、時に自らの分身を登場させたり、瞬間移動をしたり、はたまた壁の中に隠れて敵を煙に撒いたりと極めて荒唐無稽かつ壮大なスケールである。

先行研究によれば、「葉浄能詩」の中にある、葉浄能が玄宗を月に連れて行くというエピソードは、玄宗の月旅行の物語が完全に記載される最古の資料であると言われる⁽¹⁾。また、それは後世において、元代の王伯成による『天寶遺事諸宮調』や、白樺の雑劇『唐明皇遊月宮』等に影響を与えた可能性があるということも指摘されており⁽²⁾、大変興味深い史料でもある。

張鴻勳氏は『西陽雜俎』前集卷5「怪術」や『隋書』音楽志、『太平広記』などを引き、唐代の都では宮廷や寺院をはじめ、宋代に繁栄した瓦子のような、戯場と呼ばれる芝居小屋、あるいは街頭などが説唱の舞台であったことを指摘し、敦煌でも都と同様、寺院や街頭において説唱が行われていたとする⁽³⁾。

筆者は「葉浄能詩」も、張氏の挙げたような舞台における上演演目の一つであったのではないかと考える。それは「葉浄能詩」が散文と韻文から成り、この構造は同じ敦煌から出土された様々な仏教説話の形式に近いという点、また物語の内容を見ても、散文の部分は浄能と玄宗による丁々発止の対話シーンが

多く、浄能が宮廷内で玄宗の信頼を得ていく様子から、玄宗に疑われて姿を消すまでの、一人の道士の興亡の様子はあたかも映像作品を見ているかのように生き生きと描かれ、終盤の韻文にはそれまでの散文の内容の一部が含まれ、かつ押韻させていることから、これらの細やかな技巧は、すべて観衆という存在を意識した語り物、あるいは舞台作品であったと思われるのである。

しかしながら、これまでの「葉浄能詩」に関する研究では、作品の面白さについて、その構造に焦点を当てた論は存在しない。そのため、本稿において「葉浄能詩」をその構造面から作者の意図を検討することで、「葉浄能詩」がどのような性質を持つ作品であったのかを考えたい。

1. 作品概要

管見の限りでは、「葉浄能詩」に関する最も古い研究は小川陽一氏「葉浄能詩の成立について」(『東方宗教』16、1960)⁽⁴⁾であり、作品全体の構造について詳しいのは遊佐昇氏の「葉法善と葉浄能—唐代道教の一側面—」(『日本中国學會報』第三十五集、1983)⁽⁵⁾である。張鴻勳氏『敦煌話本、詞文、俗賦導論』(新文豊出版公司、1993)には、先の小川氏の論に近い形で「葉浄能詩」が紹介されている。蕭登福氏『敦煌俗文学論叢』(台湾商務印書館、1988)所収の「敦煌変文『葉浄能詩』一文之探討」は「葉浄能詩」を十六段に分け、そのうち十一の説話について、類似する説話を紹介し、かつ葉浄能という人物と唐代の皇室との関係についても検証するものであり、小川氏や遊佐氏の論を敷衍するものと言える。また道教史における意義として丁煌「葉法善在道教史上地位之探討」(成功大学『歴史学報』第14期、1988)、呉真『為神性加注：唐宋葉法善崇拜的造成史』(中国社会科学出版社、2012)の両氏によって「葉浄能詩」が取り上げられている。

これらの先行研究によれば、現存する「葉浄能詩」の写本は敦煌文献のS.6836のみで、文字の訂正の跡や紙の質からして、元は何らかの原稿があったものとみられている。計263行、約6,500字にも及ぶ長編であるが、写本の前後が欠落しているために、最終頁に記された“葉浄能詩”の四字から、「葉浄能詩」

という仮題が付される。作者、成立や書写年代については『集異記』、『仙伝拾遺』、『広異記』などを引く『太平広記』や『搜神記』、『酉陽雜俎』などに類似の内容が見られることから、作者は道教の僧あるいは道教の信仰者の手によるもので、成立は九世紀から十世紀ごろとされる。また「葉浄能詩」の特徴は、唐代に活躍した葉法善や明崇儼、羅公遠といった複数の道士の様々なエピソードが葉浄能という人物に集約されており、そのため「葉浄能詩」の各説話には類似する説話が存在すること、また「葉浄能詩」は散文と詩で構成され、詩は仏教でいう偈のように散文の内容が繰り返されることから、形式的には仏教説話の影響を受けていることにある。

「葉浄能詩」に収録される説話の区切り方については見解が定まっていない。先の遊佐氏が唯一、王重民等編『敦煌変文集』（人民文学出版社、1957）で説話を十に分けていることを根拠に、「葉浄能詩」をプロローグ、エピローグに当たる部分と、それに挟まれた十の説話部分、最後のみにかかれる四言を主とする三十八句から成る偈の部分から成るとしている⁽⁶⁾。前出の小川氏や張氏はいずれも説話部分のみに注目した論で、遊佐氏の言うプロローグやエピローグにあたる部分のエピソードや、三十八句の詩についてはほとんど触れていない。またプロローグと最後の三十八句の詩を含めて「十六段」としたり（前出の蕭氏や羅寧氏「読『葉浄能詩』」『新国学』、2002）、エピソードのみを取り出して「十四」とする論（前出の呉氏、2012）など様々である。そこで、本稿において「葉浄能詩」の説話の区切りを改めて次のように整理したい。

まず項楚『敦煌変文選注（増訂本）』（中華書局、2006）を参考に原文と照らし合わせて内容を確認した上で、序章部分、説話部分、終章部分の三つの部分を設定し、次に説話部分について、独立したエピソードを一話とみなし十一話に分ける。続いてこの設定を基に、作品全体の構造と説話部分の構造について考察を行う。

次項より、これらの設定に基づいた各部分の概要を紹介する。なお、本文中に原文を引用する際、原文に補った文字は[]、原文を訂正する文字は（ ）で示す⁽⁷⁾。また文字数については、写本に記された文字のうち、衍字を除外

したおおよその数とした。

2. 「葉浄能詩」作品全体の構造

「葉浄能詩」は序章、説話、終章によって構成されている。また、おおよその字数からみて、説話部分が圧倒的に長く、とりわけ中段が充実した内容であることが窺える。

- | |
|---------------------------------------|
| (1) 序章 (約440字) |
| (2) 説話 (約5,570字) 前段：第一話～第三話 (約1,670字) |
| 中段：第四話～第十話 (約3,280字) |
| 後段：第十一話 (約610字) |
| (3) 終章 (約440字) |

(1) 序章：浄能、宇宙一の呪符の使い手となる

写本冒頭の欠落により、前の内容は不明である。欠落部分の後からは、女道士を尊敬し、道士の道を志した葉浄能が、道教の最高宮府である大羅天の仙宮の帝釈天から神人を引き合わせられて符本一卷を授かり、符本をもとに術の会得に日々専念して宇宙一の呪符の使い手となったとある。これら符の授受方法やいきさつについては、多少の違いはあるが、佚書『葉法善伝』を下敷きにしたとされる「葉浄能詩」と、『道蔵』洞神部・譜録類「唐葉真人伝」及び『太平広記』巻26「葉法善」の三点すべてに同様の内容が描かれる⁽⁸⁾。

(2) 説話：浄能、符を駆使して活躍する

葉浄能の背景を描いた序章に続いて、説話部分では符を使ってあらゆる難題を解決していく浄能の姿が描かれる。表1より、各話の書き出しには「開元」という具体的な年号や、「經數日（数日後）」といった時間の経過を表す、言わば話題の転換の役目を果たす言葉が配され、書き終わりは必ず問題が落着いており、これらは十一の説話に分けることができる。なお、十一の説話はいずれも『太平広記』や『西陽雜俎』、『碧鷄漫志』などに所収される説話の内容に類

表1：各説話の書き出しと書き終わり

話	字数	書き出し	書き終わり
第一話	118	今乃愚（遇）唐朝天子	其河枯竭，浄能即行。
第二話	936	經數日，得至華州，	妻遂拜辭浄能。
第三話	620	浄能日了（下）	尹言其異聖事，錄表秦（奏）聞。
第四話	542	開元皇帝好道，	皇帝聞奏，慚見浄能，便歸觀內。
第五話	652	前後三日，	与太上老君而無異矣。
第六話	189	玄宗傾心好道，	自古未有似浄能者也。
第七話	208	開元十三年，	五穀豐熟，萬姓歌謠。
第八話	915	至十四年，	諸州府不敢輒行法令。
第九話	177	皇帝每日親問浄能道法，	皇后此生不合有子。浄能具奏。
第十話	601	八月十五日夜，	皇帝遂命太史官，批在唐錄。
第十一話	612	後經數日，	却歸於上界，蓋非浄能之過矣。

似していることが先行研究により明らかにされている⁽⁹⁾。

これら十一の説話はいずれも一話完結であり、それゆえ一見するとどの部分を削っても、どの部分に新たな説話を入れても、全体には影響がないような構造である。従って時と場合に応じ、すべてを通して語ったり、短縮して語ったり、あるいは一部を取り出して語ったりと講釈の調整が可能である。しかし、「葉浄能詩」の作者はこれだけ多くの説話をただ雑然と並べたのではなく、何らかの意思をもって説話を並べているのではないかという疑問が残る。この点については後述する。

(3) 終章：浄能、疑われて玄宗の元を去る

説話部分第十一話のラスト—玄宗と高力士によって暗殺されそうになった浄能が柱の中に隠れて逃げ、以降玄宗の前から姿を消してしまふ—を受けた玄宗の後日談が描かれる散文と、玄宗が葉浄能のことを詠んだ四言を中心とする三十八句から成る詩がある。詩は基本的に四言から成り、間に五言、六言や七言の箇所もみられ、全体としては雑詩の体を成し、各句の終字は『広韻』の韻目では去声・六・至、上声・六・止が多く、周大璞氏の分類ではすべて支微部に該当し、押韻していた。仮題とされる“葉浄能詩”の四字は、この終章部分の最後に付されてあるが、遊佐氏によれば、この四字は玄宗の詩に対する葉浄

能の詩が続くことを想起させるものであり⁽¹⁰⁾、筆者も同意する。

詩の内容は浄能が玄宗に出会ってからの説話の内容が含まれており、特に「葉浄能詩」の説話部分に合致すると思われる内容は九句目から十六句目に集中している。例えば九／十句目「元始太一神符／印能運動天地」（元始太一神の符印は、天地を動かすことができる）」は第二話、十一／十二句目「要五曹喚來共語／呼五岳隨手驅使（五曹を呼び共に語り、五岳を呼びいつでも駆使する）」は第七話と第九話、十五／十六句目「亦能扶朕月宮觀看／伏向蜀〔川〕遊戯（さらには朕を月宮へ連れて行き、蜀へも連れて行ってくれた）」は第八話と第十話が詩に集約されており、しかも説話の内容を繰り返すものである。また説話部分以外にも、十三／十四句目「造化須移則移／乾坤要止則止（太極を意のまま移せ、天地を意のままに止められる）」は序で触れた部分であり、十七／十八句目「朕興異心／干戈倫矣（朕の裏切りは、人の道にもとる）」は終章冒頭の散文に該当する内容であり、序章部分と説話部分及び終章部分には自然な連続性が存在している。

3. 「葉浄能詩」説話部分の構造

説話部分は、十一の説話すべてに浄能が登場し、ほとんどが良い結果に落着し、次の話題へと展開されていく。具体的に各話の舞台、時代（年号）、登場人物、話題（難題）、救済対象、法術とその回数、結果を抜き出したところ、説話部分の構造がいかに周到なものであるかが分かった（表2参照）。

先に述べた「葉浄能詩」全体の構造同様、「葉浄能詩」の説話部分も前段・中段・後段の三部で構成されている。前段は浄能が都へ向かう道中の第一話から第三話までで、救済対象は浄能自身か市井の人々である。中段は第四話から第十話までで、詳細は後述するが、前段のエピソードを受けての類似エピソード（第一話と第四話）や、前段の登場人物の再登場（第二話と第七話の山岳神）、中段内でのエピソードの繰り返しが見受けられる（第四話と第九話、第四話と第十一話、第八話と第十話）。特に第十話は冒頭にも挙げたように「月宮に遊ぶ」という、極めてファンタジー色が強いエピソードであり、クライマックス

表2：「葉浄能詩」説話部分の構造

段	話	場所	時代	登場人物	話題(難題)	救済対象	法術と回数	結果	
前段	一	会稽山	開元	葉浄能、大羅天の神	川が氾濫する	浄能自身	符を一回投げる	川の水が干上がる	
	二	華州	数日後	葉浄能、華岳神三郎、張令將軍とその妻	張令の妻が華岳神の三郎に誘拐される	人間の妻	符を三回投げる	三種類の神人に変化し、岳神を説得。妻は正気に戻る	
	三	長安	その晩	葉浄能、康夫妻と娘役人、野次馬	娘が狐に憑依される	娘	狐を三つに斬る	三つに斬られた狐が残り、娘は正気に戻る	
中段	四	宮廷から 銭塘江へ		葉浄能、玄宗	銭塘江の大蛇	玄宗、 浄能自身	符を一回投げ、大蛇を三つに斬る	銭塘江を渡れるようになり、仙薬も得られた	
		宮廷		葉浄能、玄宗、高力士、 五百名の太鼓奏者	宮廷内の妖魔退治を命ぜられる	浄能自身	水を一回吹くと雲と霧が戦い、大蛇が登場。妖魔をけちらす	妖魔は高力士が用意した五百名の太鼓奏者だったことが露わになる	
	五	宮廷	三日後	葉浄能、玄宗、高力士、 酒飲み道士、取り巻き	酒飲み道士が礼を逸する	玄宗	高力士に酒飲み道士を斬らせる	道士は消え、酒瓶の蓋だけが残り、皆から喜ばれる	
	六	宮廷内		葉浄能、玄宗、神人	夢の中で食した龍の肝の話 を玄宗から聞く	玄宗	水を入れる盆の中に符を落とすと雲と霧が戦い出す	霧が雲を吸収し、神人が龍の腿肉三十斤を送り届けにやってくる	
	七	宮廷内	開元13年	葉浄能、玄宗、姚崇、宋璟、 五岳、天曹、四瀆	干ばつの解決を頼まれる	人民	符を一回ずつ投げて五岳、四瀆に相談	三日間、雨が降り続く	
	八	宮廷から 劍南へ	開元14年 元宵節	葉浄能、玄宗、高力士、 従者たち、蜀王と臣下	瞬間移動する(大勢)	玄宗	符を一回投げる	故意に残しておいた玄宗の肌着に気づいた蜀の人たちから、玄宗が驚きと賞賛を受ける	
	九	宮廷内		葉浄能、玄宗、王皇后、 神人、天曹、地府	子の有無を占うよう玄宗から頼まれる	玄宗、 王皇后	符を一回投げて天曹と地府に相談	「子は無し」という結果が届く	
	十	宮廷から 月宮へ	8月15日	葉浄能、玄宗	瞬間移動(二人)	玄宗		皇帝は大満足	
	後段	十一	宮廷内	数日後	葉浄能、美しい宮女、 神人、玄宗、高力士、 五百名の金吾	玄宗の寵愛する宮女が半年後に懐妊し、疑われる浄能	浄能自身		浄能は柱の中に身を隠して高力士が用意した五百名の金吾から逃れ、紫気となって天界へ

には最適といえよう。後段は第十一話であり、続く終章の散文と密接なつながりがある。小川氏が指摘する通り、「葉浄能詩」の物語は独立した形の説話が数珠つなぎに並んでいる⁽¹¹⁾ のであるが、さらに言えば、これらの説話が数珠つなぎに並ぶための、何らかの特徴も存在しているように見える。そこで表2のうち、時系列、動作の繰り返し、話題の繰り返しとその規模という点に注目したところ、その特徴がより鮮明になった。つまり表2のベクトルは下りの一方向にしか進めず、逆に前に戻ることができないのである。終章の詩の内容がこの説話部分の順序を反映していることも、それを物語っている。

4. 説話部分の特徴

説話部分には次の特徴がある。それは、ゆるやかな時系列、動作の繰り返し、話題の繰り返しとその規模という点である。以下、それぞれの特徴について述べる。

(1) ゆるやかな時系列

各説話はゆるやかな時系列でつながっている。各説話の書き出しを見ると、第一話は「今乃愚（遇）唐朝天子、三皇五帝開闢已（以）來、未似我玄宗皇帝聖明（今はまさに唐朝の天子の時代、三皇五帝の開闢以来、我らが玄宗皇帝のような才智に秀でた王はいない）」と、物語は唐の開元の時代という設定であることが提示されており、第二話では「經數日、得至華州、華陰懸（縣）東五里已來（數日後、（浄能は）華州に到着した。華陰県へは東へ五里ほどの辺りである）」、第三話では「浄能日了（下）、即策杖尋途（その晩、浄能は従者とともに帰宅の途についた）」というように、前の話題を受けての時間とみなせる表現が施されている。

また、具体的な年月や時間は示されていないが、第四話は第三話までの活躍を受け、浄能は皇帝から命じられて宮廷入りし、第五話の「前後三日、皇帝詔浄能於大内飲宴、作樂動簫韶（三日後、皇帝は浄能を宮廷内での宴に誘った）」という記述については、「第四話で起こったことから三日後」ととるのが自然

である。第七話は「開元十三年、天下亢旱、帝乃詔百僚（開元十三年（西暦725年）のこと、天下では日照りが続いており、皇帝は官僚を呼び寄せて言った）、第八話は「至十四年、皇帝大赦天下、一任百姓點燈供養（開元十四年（西暦726年）に至り、皇帝は天下をお赦しくださり、庶民も觀燈し、奉納できるようにになった⁽¹²⁾）」とそれぞれ具体的な年号が記されており、特に第八話は元宵節の話で、旧暦の一月十五日付近という具体的な時間の設定がなされている。

続く第十話は「八月十五日夜、皇帝与浄能及隨駕侍從、於高處既（斲）月（八月十五日の夜、皇帝は浄能と侍従たちと満月の光景を味わうために高みに登った）」とあり、第八話と同じ開元十四年の話かどうかは定かではないとしても、「一月」から「八月」へという自然な暦の流れが存在する。また、浄能の台詞「[劍]南看燈、凡人之處。月宮上界、不同人間。緣陛下有仙分、其可覽往（劍南の觀燈は皆で行くことができましたが、月宮は天界にございますので、人間界とは違います。陛下は道への信仰が厚くございますので、短い間でしたら行く事ができるでしょう）」は、前の第八話での觀燈のエピソードを引き合いにしたものであり、ゆえに第十話は必ず第八話より後置されていなければならない。第十一話についても「後經數日、浄能見大内一宮人、美貌殊絕、每見帝寵（数日後、浄能は内裏である女性を見かけた。その女性の美貌は殊更で、いつも皇帝から寵愛を受けていた）」とあり、直前の話題からの「数日後」と考えられる。

なお第四話と第六話、及び第九話については前後の話との時間の関係を示すような記述はみられなかった。他の話とは直接影響しない内容であるため、省略可能な話であると思われる。

(2) 動作の繰り返し

十一話の説話のうち、八つの説話において、動作の繰り返しが見受けられた。

A群：「書符一道（符をひと書きし）」の後、水の中に符を置く動作が続く

①行經數日、大羅王化作一河水、其河闊五里已來、又無橋舡渡人之處、而

試淨能。遂書符一道、拋向水中、其河枯竭、淨能即行。(第一話)

(淨能が数日間、旅をしていた時、大羅天の神は(その地を)川の水に変えてしまった。その川の広さは五里ほどあり、橋が無く、船で川を渡る人のいる所で、(神は)淨能の力を試したのだった。淨能はすぐさま符を書き、水の中へ向かって投げた。すると川の水が枯れて、淨能はすぐに渡ることができた。)

②淨能遂書符一道、拋向江中、其江水(汎)澄三月(日)漂其悪蜃於沙灘之[上]。淨能亦(一)見、劣時斬為三斷(段)。(第四話)

(淨能はすぐに符を書き、河へ向かって投げた。すると河の水が無くなりはじめ、三日後には干あがって蚊龍の姿が砂の上にあらわになった。淨能はそれを見て、すぐさま三つに斬った。)

③劍横逆其上作法、書符一道、拋著盆中、雲露(霧)斗闇、良久中間、露(霧)收雲散(後略)。(第六話)

(劍を抜いてその上で法術を行い、符を書いてお盆の中に落とした。すると雲と霧が戦い出して、しばらくすると中央にあった霧が雲を吸収して消えてしまった。)

B群：呪符を書いた直後の動作が皆、「吹向空中(空へ向かって吹く)」

④淨能遂取筆書一道黒符、吹向空中、化為著黒衣神人、疾速如雲、即到岳神廟前。(中略)〔淨能〕作色愠然。又取朱筆書符、吹向空中、化作一使人、身著朱衣。(中略)淨能聞説、作色重容、怒使使人曰「大不了事」。囁在一邊、又取雄黄及二尺白練絹、畫道符吹向空中、化為一大將軍。(第二話)
(淨能はすぐに筆を取って黒符をしたため、空に向かってひと吹きし、黒衣の神人に変身した。そして、雲のように素早く、すぐさま岳神廟の前へ着いた。(中略)〔淨能は〕たいそう怒った。そしてまた朱筆を取って符を書き、空に向かって吹くと、今度は朱衣を身に着けた使者へと変身した。(中略)淨能はこれ聞き、顔色を変え、憤怒して使者へ言った。「お前はまったくわかっていない！」そうして使者を側に立たせ、また鶏冠石と二尺の白絹を取り、白絹に符を書いて空に向けて吹くと、大将

軍に変化した。)

- ⑤淨能便對皇帝書符、吹向空中、當時化為神、便乃昇天。又書符牒問地府。

(第九話)

(淨能はすぐに皇帝についての符を書き、空中に向かって吹くと、神へと変わり、すぐに天へ昇って行った。さらに、符を書いて地府へも尋ねた。)

C群：A、B群以外のもの

- ⑥於是淨能懷中取筆、便於瓮子上畫一道士把酒盞飲帖在瓮子上、其瓮子便變作一箇道士。(第五話)

(そうして淨能は懷から筆を取り出し、杯を持ち、酒を飲む道士の絵を瓶に描いて札を貼った。すると、その瓶はあつという間に一人の道士に変化した。)

- ⑦淨能對皇帝前、便作結壇場、書符五道、先追五嶽直(值)官要雨、五嶽曰「皆猶(由)天曹」。(第七話)

(淨能は皇帝の前ですぐに壇場を作り、五つの符を書き、まず五岳の当番の仙官を追いかけ、雨を降らせるよう要求した。五岳は言った。「すべて天曹のせいだ。」)

- ⑧淨能遂歸觀内、畫一道符、變作一神。(第十一話)

(淨能は道觀へ戻ると、符をしたためて神に変身した。)

以上のように、符を書いたり、符を投げたり、符を水の中に向かって投げたり、符や水を空に向かって吹くという一連の動作の頻出は、「葉淨能詩」における決まり文句を意味し、この文句が登場すれば、葉淨能の勝利という予定調和の結末が間近いことを聴衆へ暗示しているのではないだろうか。また、例えばB群で言えば、④は三度も呪符を書いており、多少の違いはあるものの、いずれも「取筆(筆を取って)」、「書符(符を書いて)」、「吹向空中(空へ向かって吹く)」と続くが、⑤については「便對皇帝書符、吹向空中(すぐに皇帝の符を書き、空中に向かって吹く)」と、動作に特別凝った表現はみられないなど、物語が進んでいくにつれ、人々が淨能の動作についてもはや簡単に予想で

き、話が進むにつれ表現も簡素になってゆくことから、決まり文句として用いられていることが窺える。

(3) 話題の繰り返しとその規模

前に起こった話題が後の説話で再び登場する。かつ、その規模は後の説話のほうが大きい。以下に具体例を六つ挙げる。

- ①第一話と第四話の法術とその結果：第一話と第四話はほぼ同一表現であり、第一話は「遂書符一道、抛向水中（浄能はすぐさま符を書き、川の中へ投げた）」に対し、第四話は「浄能遂書符一道、抛向江中（浄能はすぐに符を書き、銭塘江へ投げた）」とあり、下線部分の名詞だけが異なる。つまり第一話の舞台が名の無い川であるのに対し、第四話は現在もその激流で有名な浙江省の銭塘江が舞台であり、難題の規模が大きくなっていることが分かる。
- ②法術の回数：第一話では符を一回投げ、第三話では狐を三つに斬る。第四話はこれらの法術とその回数が総合され、「符を一回投げ」、かつ「大蛇を三つに斬る」。
- ③岳神の登場：第二話と第七話に登場する。第二話で登場する山岳神は華山神のうち、三郎という一人の強情な神で、浄能とは対立関係にあったが、第七話では「五岳神」と複数の山岳神が登場し、浄能とは協力関係にある。また、第二話の救済対象は人間、しかも県令の妻というように具体的であるのに対し、第七話の救済対象は不特定多数の人民である。これより、ある人の妻の蘇生といったごく個人的な問題から、雨乞いという不特定多数の人民の困り事を解決するというように難題の規模が拡大されていることが分かる。
- ④雲と霧が戦う：第四話と第六話に同様の場面がある。第四話は「水亦（一）離口、雲霧斗闘、化作大蛇、便入地道。眼如懸鏡、口若血盆、毒氣成雲（浄能の口から水が放たれた瞬間、雲と霧が戦い、大蛇と化してすぐさま地下の穴へ潜っていった。その目は鏡が掛かっているかのように光り、口は血盆のように真っ赤で、毒気で雲が作られていた）」というように、雲と霧

の戦いよりも、戦いの結果登場する大蛇の迫力や、大蛇が五百人の太鼓打ちをけちらす様子の描写に重点が置かれるのに対し、第六話は「劍横逆其上作法、書符一道、抛著盆中、雲露（霧）斗鬪、良久中間、露（霧）收雲散（浄能は劍を抜き、その上で法術を行い、符を書いてお盆の中に落とした。すると雲と霧が戦いはじめ、しばらくすると霧が雲を吸収して消えてしまった）」とあり、第六話の結末である天から龍の肉が届けられたということよりも、雲と霧の戦いに重点が置かれる。第六話で雲を吸収した霧は、続く第七話の雨乞いのエピソードの伏線ともいえ、そのため第四話よりも雲と霧が戦うということに注意が向けられるようにしているのであろう。

- ⑤高力士と五百名の従者：第四話と第十一話に登場する。従者の数は同じように五百名であるが、第四話では太鼓打ちという役割であったのに対し、第十一話では金吾という護衛兵であり、葉浄能にとっての「敵」の質が上がっている。
- ⑥宮廷から宮廷外へ瞬間移動：第八話と第十話でいずれも葉浄能と玄宗が瞬間移動する。しかし第八話では劍南という実在の地への移動であるのに対し、第十話では月宮という未知の世界への移動という違いがある。加えて、第八話では従者は何人でも良かったが、第十話では浄能と玄宗の二人だけに限定されている。規模の拡大に加え、誰もが体験できることではないという特別性も加わっている。

このような細やかな仕掛けは、長編の物語において一人の道士を通して登場させるうえで有効な手段であり、すべての話に登場する主人公の浄能に課される難題のスケールをゆるやかに大きくすることで、浄能の成長を表すものであろう。これも、観客の興味を維持させる一つの演出とみられる。

また、各説話は有機的につながっているため、説話同士の交換ができず、一方行にしか進めないことが分かる。ただし、その合間に何らかのサイドストーリーを加えたり、反対に話を省略したりする空間も残されていることも窺える。

おわりに

以上、「葉浄能詩」の構成や個々のエピソードを洗い出し、それを再度俯瞰することにより、僅かながら作者の創作意図に近づくことができた。「葉浄能詩」は作者の工夫が随所に見受けられる、一つの娯楽作品であると言って良いだろう。なぜならそこには、主人公の成長を追いながら予定調和の結末を繰り返し、一方で時に人の想像を超える、極めて壮大なスケールのお話を盛り込んで聴衆を楽しませよう、飽きさせないようにしようとする作者の思索の跡が見てとれるからである。

「葉浄能詩」は唐代以降の敦煌にも存在していたであろう、冒頭に述べた様々な舞台において、一つの演目として語られていたと推定する。また、例えば俗講の目的がそもそも仏教の布教やその拡大であったように、「葉浄能詩」ももとは道教への理解を得るための布教目的の語り物であったはずが、時を経て種々の演芸が大衆に受け入れられるようになるのと宗教色が薄れ、人気演目の一つへと転化していったのではないかと考える。

最後に、説話の第十話にある玄宗の月旅行のモチーフについて、類似すると指摘される『太平広記』巻22「羅公遠」や『碧鷄漫志』巻3に見られる表現について触れておきたい。それは、「拄杖向空擲之、化為大橋、其色如銀（杖を空に向けて投げると、大きな橋と化し、それは銀色のものであった）」という一文であるが、興味深いことに、アレンジされた形で元代の『天寶遺事諸宮調』（『雍熙樂府』所収）の中に「把拄杖隨時擲起、……紅橋千丈、碧空懸月色如銀燦爛（杖をいつでも投げれば、……赤い橋は千丈あり、紺碧の空に月が懸り、その色は銀のごとく燦爛ときらめき）」と登場する（下線は共通する文字）。これは「葉浄能詩」には見られない表現であったが、同『天寶遺事諸宮調』には「葉浄能詩」にも登場する「広寒宮」や「葉法善」、「葉靖」といった語が散見され、「葉浄能詩」と、「葉浄能詩」中の説話に類する唐代成立の説話群、及び後世の語り物作品との比較検討のための余地がなお残されているように思われる。この点については、今後の課題としたい。

〈注〉

- (1) 高国潘「敦煌科幻故事『唐玄宗遊月宮』及其流變」（『敦煌俗文化学』、上海三聯書店、1999）
- (2) 朱紅「唐代中秋玩月詩与道教信仰」（『雲南大学学报』第十二卷・第四期、2012）、桜木陽子「『天宝遺事諸宮調』の物語展開と季節描写」（『中国古典小説研究』中国古典小説研究会、2010）など。
- (3) 『敦煌説唱文学概論』（新文豊出版公司、1993）129—162頁。本書において張氏は唐代の都や敦煌における説唱の場について、変場・街頭・寺院・戯場・個人宅・その他の歌場や村の巡回などの場を挙げるが、敦煌での説唱の実施についての具体例としてはS.381「龍興寺毘沙門天王靈驗記」を引き、敦煌の名利であった龍興寺において官僚や百姓たちを観客とした娯楽が行われていたという指摘にとどまる。しかしながら本稿で述べたように、「葉浄能詩」の構造や、他の敦煌出土文献、また莫高窟の壁画など現存する史料から、敦煌において少なくとも寺院や街頭での説唱が行われていた可能性は高い。
- (4) 後年、該論文の一部は「道教説話」と題して講座敦煌4『敦煌と中国道教』（大東出版社、1983）に所収されているが、内容に相違は見られない。
- (5) 152—165頁。該論文は後年、『唐代道教文学』（2014）に所収されているが、内容に相違は見られない。
- (6) 遊佐昇「葉法善と葉浄能—唐代道教の一側面—」（『日本中國學會報』第三十五集、1983）、『唐代社会と道教』（東方書店、2014、56頁）。
- (7) 欠字、訂正字の判定には黄徴、張涌水『敦煌變文校注』（中華書局、1997）及び『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、1998）等を参照した。
- (8) 遊佐氏によると、道教經典『道藏』所収の「唐葉真人伝」と『太平広記』巻26「葉法善」には共通する記述が多く、『葉浄能詩』の各説話とも内容が類似しており、また『太平広記』巻26「葉法善」の本文にある「本伝」という記述（二か所）、『新唐書』巻59・芸文志3・子部・道家類及び『通志』芸文略・巻8・諸子類・道家・伝には劉谷神なる人物によって撰された『葉法善伝』という記述がみられることから、『葉法善伝』から『葉浄能詩』、「唐葉真人伝」と『太平

広記』巻26「葉法善」が作製され、「唐葉真人伝」と『太平広記』巻26「葉法善」は同一系統、『葉浄能詩』は別系統としている。序章部分の記述の差からもそれが窺える。

- (9) 小川陽一「葉浄能詩の成立について」(『東方宗教』16、1960)及び「道教説話」(講座敦煌4『敦煌と中国道教』大東出版社、1983)を参照。小川氏は「葉浄能詩」は十個の物語から成るとし、十の物語に類似する説話の典拠を示したうえで、「葉浄能詩」は類似する説話を主人公、場所、時間を統一して数珠つなぎにしている作品であるとし、また、張氏は『敦煌話本、詞文、俗賦導論』(新文豊出版公司、1993)において「葉浄能詩」を話本と分類し、小川氏同様、各エピソードに類似する説話を紹介している。
- (10) 遊佐氏「文学文献より見た敦煌の道教」(講座敦煌4『敦煌と中国道教』大東出版社、1983)278頁参照。
- (11) 本稿注9参照。
- (12) 史実として開元十三年に観燈が庶民にも赦されたという記述は見当たらず、「葉浄能詩」作者の創作であると思われる。

(付記) 本研究は日本学術振興会基盤研究(C)「日中説話比較に向けての敦煌文献説話研究」研究課題番号：26370404の助成を受けたものです。本稿ならびに本稿に引用した原文併記の拙訳など、様々な点において代表者の伊藤美重子教授をはじめ、諸先輩方より多大なご指導を賜りました。